

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4570800195		
法人名	医療法人 隆徳会		
事業所名	グループホームあじさい		
所在地	宮崎県西都市聖陵町1丁目15番地		
自己評価作成日	令和4年6月1日	評価結果市町村受理日	令和4年9月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action_kouhyou_pref_search_list_list=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会		
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階		
訪問調査日	令和4年7月28日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

現在、新型コロナウイルス感染症対策により、地域や外部との交流だけでなく、外出、外食など季節のイベントを行う事が出来ていない。しかし、施設内で穏やかに生活を行ってもらえるように日中の活動で、運動や頭の体操を行い、利用者個人にあった活動の支援を行っている。また、遠出が出来ないが季節を感じ、近所の方と少しでも交流を行うため、散歩に出かけている。施設の畑では野菜を栽培し成長を楽しみ、職員と利用者が一緒に収穫、調理を行うことで、収穫した野菜を食事でおいしく頂いている。地域との交流では、間接的ではあるが、地域包括ケア推進係から声をかけてもらい、世界アルツハイマー月間における広報・パネル展示企画に参加し、西都市の商業施設にて、利用者や職員のコメントや、利用者や職員と一緒に作成した季節の壁飾りを展示させてもらっている。家族との面会では、感染の状況を把握し感染対策を行い、出来る限り一緒に過ごしてもらえるように支援を行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者のリーダーシップのもと、全職員が「今より更に、利用者の側に立った介護があるのではないか」という、現状に満足せずに更に上位を目指そうとしている事が伺えるホームである。
感染防止対策で、出来なくなった事を転化して、屋内リハビリテーションや脳トレーニングを工夫している。
今年も世界アルツハイマー月間中の西都市認知症フェスティバルに、利用者の共同制作作品を展示する目標を掲げ、全員で取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	分かりやすい理念を作成し、ホールに掲示する事で共有を行っている。	「ゆっくり、楽しく、いっしょに」を基本理念に掲げ、更に具体的な介護に反映する内容となっている。今年度の見直しで、表現のスリム化を検討する意向である。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス感染対策で地域との接触が出来なくなっている。定期受診等で外出した際に、近所の方や、知り合いの方が声をかけてもらえることがある。	コロナ禍以前は、百歳体操やオレンジカフェをホームで行い、地域との交流が行われていた。現在は、受診等で外出時の挨拶程度であるが、民生委員や自治会長にはホームの情報を発信し、地域との交流が途切れないように努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在、感染対策等の理由で、地域の方との交流が行えていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染対策の為、開催は行えていない。開催月に報告する内容は、書面で提出を行っている。	運営母体に3ホームがあり、ホーム外で推進会議を開催している。現在は書面会議であるが、ホーム持ち回りの開催を検討している。毎月発行する「通信簿」の行事写真は全員を載せたら良いとの意見があり、利用者や家族からも喜ばれている	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃より市町村から連絡をもらい、感染対策等アドバイスをもらっている。また認知症フォーラムの声を掛けてもらい、当ホームで作成した飾りを展示していただいた。	管理者は西都市政策会議のメンバーでもあり、相互の相談、助言、情報提供が良く図られている。昨年より認知症フォーラムを商業エリアで開催し、ホームの作品を展示した。見学した家族の評価もよく、今年度も出展を予定している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月に一度カンファレンスを行い、その時に定期的に身体拘束等について話し合い、勉強会を行っている。玄関の施錠については、通路から近いため安全を考慮し、終日施錠を行っている。	職員は身体拘束の弊害を理解し、身体拘束のないケアに熱心に取り組んでいる。勉強会では、職員間で無意識に、「～させる。」など、威圧的な発言に着目して、言葉の言い換えについて取り組んでいる。	

宮崎県西都市 グループホーム「あじさい」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	現在は研修等に参加が行えていないが、これまでに参加した研修を参考に、勉強会を行い現在の支援で虐待が行われていないかを確認し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、成年後見制度の利用もなく、また研修等への学びの場へ参加が行えていない。今後制度の活用も視野に入れ、学ぶ必要がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約について、家族に理解してもらえるように説明を行っている。その際に疑問に思ったことなども確認を行っている。また改定等あった時には、口頭と書面での説明を行い承諾してもらっている。疑問に思った事などは、いつでも対応できるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、家族等が話しやすい関係性を築くようにしている。相談等しにくいことについても、意見箱を設置し、意見や要望があった時には、職員で話し合いを行って、対応を行っている。	家族会総会等がコロナ禍のため出来ていない。家族へは毎月「写真を多く取り入れた「通信簿」を発送している。また、ガラス越しの面会や、嗜好品の差し入れなど、利用者や家族の希望を個別に対応している。	家族との面会が困難な状況では、スマートフォンを利用したビデオレターやホームからの連絡の効率化を図ることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や提案については、会議だけでなく普段から話してもらえるよう関係を築いている。また、年に一度職場での自己申告書での記入を行い、意見を伝える事が出来ている。	法人幹部や介護施設管理者も参加する定例会議は、法人全体が目指す方向性や期待される職員像を職員が理解する機会となっている。個別面談や相談は随時行い、運営に関してイベントや庭園のレイアウトの意見を反映させた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務状況等についてはタイムカードや勤怠表にて把握を行っている。労働時間や働きやすい職場環境を作るように、配慮を行ってくれている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在、外部研修へは積極的な参加が行えていない、法人内での研修は機会があれば参加している。今後、各職員にあった研修へ参加できるように計画を行っている。今までに参加した研修を基に新人職員へ指導を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍の為、相互訪問等でのサービスの向上等活動が行えていない、ネットワークでは連絡協議会に加入している為、各情報等、連絡を取ることが出来ている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今までの生活歴をふまえ、本人の希望される生活が行えるように、本人の状態を見て話してもらえる関係づくりに努め、時にはこちらから要望等がないかアプローチを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の見学や面談の際に、出来るだけ質問や不安に思う事を聞いている。また、世間話などを通して困っている事などがあれば、話してもらえるように心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現在の状態を見極め、当施設だけでは対応が難しい場合などには、他のサービス利用も出来ることを説明し、了解をもらって対応を行っている。今後、状態を見て他のサービス利用が出来るように安心してもらえるように、本人、家族に説明を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分で出来る事を尊重して、出来る事は利用者本人に行ってもらっている。利用者本人が出来ないけど、行いたい気持ちがある場合は、出来る範囲で職員と一緒に行うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会など以前のように会うことは出来ないが家族と会える機会を積極的に設けている。家族から職員に対し申し訳ないと言われることがあるが、気にしないでもらうように伝え、家族にしかできないことを職員からお願いし、家族の絆が保てるように支援を行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染対策の為、面会に制限があり会うことが出来ない。しかし、電話や郵便などで関係を保つ事が出来るように支援している。	外出や面会が制限されている中では、写真を基に話題を引き出したり、写真が少ない利用者には、若いころの仕事の事や、住んでいた地域や友人を話題にして寄り添い、関係が途切れないように努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々のレクリエーション等への参加を通して、お互いに関わりあえるように支援を行い、食事の席など定期的に変更など行えるようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者本人や家族に対して、退所後も気兼ねなく相談等行ってもらえるように気持ちを伝えている。また、利用者の退所後移動先には、情報の提供を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話や利用者の状態を把握し、希望等がないか把握できるように努めている。意思の伝達が難し方では、行動などを見て職員で意見を出し合い、どのように支援を行ったらよいか実践している。	介護記録の検討に合わせ、利用者の発した言葉をそのまま記録することで、職員個々の受け止め方の違いを、多角的な利用者の把握と捉え支援に繋げるようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	他の事業所からの情報提供や、利用開始前の聞き取りだけでなく、家族へ日々の生活の報告などを行い、今までの思い出を通して、生活歴などを把握できることがある。また、ふとした瞬間に利用者本人が話してくれることがあり、職員で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人一人の行動や話を記録に残し、職員間で共有を行い、新しい発見に繋がることある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人や家族の話を行い、より良い生活が送れるようにどうしたら良いかを、カンファレンスや会議で意見を出し合い、利用者にとって必要な介護計画の作成を行っている。	利用者担当職員がカンファレンスに、家族の意向や利用者の情報を提供している。長期目標は認定有効期間、短期目標を6か月以内、モニタリングを毎月実施して、現状に応じた柔軟性を持った介護計画となっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録にその日の様子や些細な事を記録し、毎朝記録の報告を行い職員間で共有している。情報の共有を速やかに行う事で、新たな支援や計画の見直しを行う事が出来ている。		

宮崎県西都市 グループホーム「あじさい」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々のレクリエーション等への参加を通して、お互いに関わりあえるように支援を行い。食事の席など定期的に変更など行えるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティア等外部の来訪は行っていないが、理容や病院の利用を行っている。また、避難訓練を行い消防署の協力をもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者本や、家族の同意のもとで、希望に添った医療機関を利用でき、適切な医療を受ける事が出来るように支援を行っている。	希望するかかりつけ医への継続受診を支援しているが、現在は利用者全員が協力医療機関の医師をかかりつけ医としているため、月1回ホームとして主治医に会い、必要な情報提供と助言を得ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、日常生活の中で気づきや、疑問点について、契約している訪問看護に、報告、相談が行え、早急に適切な受診や看護を受けられる体制が整っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、医療機関に情報の提供を速やかに行っている。入院中は、定期的に状況の確認を行い、病院関係者だけでなく、本人や家族と情報の交換が円滑に行える関係づくりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際に、重度化や終末期の方針について、本人、家族と話し合いを行っている。また、当事業所ではどこまでの事が出来るのか説明を行っている。	急変時には法人内の訪問看護や医療機関と連携して対応するなど、重度化や終末期における方針については本人・家族に十分説明し書面での同意を得るようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の訓練は行っていない。急変や事故発生時の対応については、経験やマニュアルを活かして対応を行っている。今後、緊急時の訓練や研修への参加が必要。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域との協力体制では、同施設の2階が職員寮になっている為、協力の体制は整っている。また災害や日時によっては避難訓練を年に3回行っている。	定期的に年3回の避難訓練や3日分の災害備蓄に取り組んでいる。ただ、水害を想定しての2階への避難では車いす利用者が多いと体制的に困難を伴うことが課題になっている。	水害は台風や線状降水帯に起因する災害であり、事前避難が可能である。法人の他ホームや施設への計画的避難や、ホームエレベーターの設置等、実施可能な災害対策の検討を期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人一人の性格や病状を把握し、人格を尊重した言葉かけや対応を行うように心がけているが、完璧に行える職員はいない。そのため、適切でない言葉かけや対応については、職員間で話し合い、時には会議で話し合いを行う事がある。	利用者一人ひとりの性格や情報の共有を行い、プライバシーを傷つけないように声掛けしている。特に声の大きさや表情等で不快感を与えることにも留意し職員間で話し合い、お互いに注意し合うようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、出来ないことであっても利用者本人が希望や行動していたら、出来る限りの範囲で安全に注意し、行ってもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側での一日の流れはあるが、その中で利用者のペースで行いたいことを出来るように支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類に関して、利用者本人が選んだ物を着てもらっている。組み合わせが合わなかったり、重ね着をすることもありますが、一度選んできてから支援を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の準備や、食前のテーブル拭きや、片付けを出来る範囲で、職員と一緒に持っている。	ホームで栽培した野菜の収穫や皮むきと一緒にしたり、できる人にはテーブル拭きや下膳の手伝いを声掛けしている。献立は毎日職員間で話し合い、食事提供をしている。	献立は翌週分を事前に計画しておくなど、メニューに偏りが生じないよう長期的にバランスの取れた献立づくりを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量の把握は記録で行う事が出来ている。水分の摂取が自力では難しい利用者には支援を行い、摂取量の少ない方には、声掛けや支援で行ってもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアを自分でできる方には、見守りや一部介助で行ってもらい。介助が必要な方には介助を行っている。一人一人が出来る事を把握し、支援を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄習慣を記録に残し把握し、出来る限りトイレで排泄が行えるように支援を行っている。	入居前はおむつ使用だった利用者がトイレで排泄ができるようになった事例もあり、水分摂取量の把握や定時のトイレ誘導などできるだけトイレ排泄ができるように支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的に自然排便が行えるように、乳製品、食物繊維の豊富な食事や、日々の運動など行いお腹の状態を整えている。また記録により排便の状態や量、周期の確認を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	利用者の生活に支障のない時間帯に2日に一度入浴を行っている。しかし、利用者の方の状態や希望に応じて、入浴が可能な時には対応を行っている。	入浴剤やゆず風呂を提供したり、ゆっくり時間をかけて入浴を楽しめるようにしている。入浴は原則二日に1回だが、利用者の希望や状況によっていつでも入浴できるように支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者個人の生活リズムに合わせ、時間を決めず、自由に休めるように支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情等使用し、用法容量について情報を共有し理解を行っている。薬の管理についても、誤薬等ないように、複数回確認を行い対応を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員だけでなく、家族の協力等ももらい、利用者個人が日々楽しく活動が行えるように、利用者個人に合わせた支援を行っている。		

宮崎県西都市 グループホーム「あじさい」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルス感染対策等の為、現在外出や外食など出かける事は出来ていないが、利用者によっては、他の医療機関を利用するため、家族と外出を行っている。施設外の散歩は、天候や体調を見て可能な時に職員と出かけている。	コロナ禍以前は花見や外食、買い物などで外出支援を行っていたが、コロナ禍以降は遠出は行えず、歩いて行ける範囲で花見やマラソン大会を見に出かけるなど、気分転換につながる外出支援に努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、利用者本人が直接買い物を行う事は出来ていないが、希望の物を職員や家族の協力のもと購入は行えている。管理については、基本的に大金は本人、家族の了解のもと施設で預かっているが、本人や家族の希望で自分で管理される利用者もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙について、時間帯にもよるが自由に連絡が行えるように支援している。自分で携帯電話を所有されている方もいて自由に連絡を取られている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有の空間は、季節の装飾を行い季節感を取り入れている。快適に過ごせるように、空調や照明等配慮している。	ホールは広々として体操やボーリング、輪投げなどができ、普段はソファを4台置き、自席だけでなく好きな場所でゆっくり過ごせるようにしている。また、壁には季節に合った飾り付けをしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者個人が自由に過ごせるように、ホールには、テーブル席とソファを4つ設置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物などを配置できることを、本人、家族に話し、過ごしやすい居室づくりを自由に行ってもらえるように支援を行っている。	居室にはホームの備品としてタンス、ベッド、エアコン、掲示ボードをそろえ、特に掲示ボードには家族の写真や作品等を飾り居心地良く過ごせるように工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホールのづくりが広々とした空間になっていて、バリアフリー、手すり、テーブル等の位置を工夫し安全、安心して生活できるように日々工夫を行っている。		